

テネシヤス D 運命のピックをさがせ!

2008(平成20)年6月9日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★



監督・脚本=リアム・リンチ/製作総指揮=ベン・スティラー/脚本・製作=ジャック・ブラック、カイル・ガス/出演=ジャック・ブラック/カイル・ガス/J・R・リード/ベン・スティラー/ロニー・ジェームス・ディオ/ミート・ローフ/ティム・ロビンズ (プレシディオ配給/2006年アメリカ映画/93分)

……「テネシヤス D」とは、地上最高のロックバンド名。どの喉からこんな美声が？ どの指からこんな美しいギター演奏が？ 誰もがそう思う、メタボな2人の中年男が、「指輪」ならぬ「運命のピック」を探す旅はおバカ、おバカのオンパレード。そんなギャグ映画がなぜ R-15 指定に……？ 音楽好きのあなたなら、その下ネタ満載の歌詞を含めて、十分楽しめるはず。

この映画は一体ナニ……？

実在のロックバンド「テネシヤス D」のジャック・ブラック (1969年生まれ) とカイル・ガス (1960年生まれ) の2人が、ロックンロール歴史博物館に眠っている「運命のピック」を探す旅は、『ロード・オブ・ザ・リング』と同じような(?) アドベンチャーがいっぱい!

おじさん2人の旅らしく、時に「目的をとるか、女をとるか」でケンカ別れをしたり、時にジャック・ブラックが幻覚キノコに幻惑されたりと、おバかな行動を続けながら、遂にロックンロール歴史博物館に到着。赤外線でも厳重に防御された最後の障害を〇〇芸で突破した2人は、遂に「運命のピック」を手に入れたが……。

メタボな2人から、なぜこんな音楽が……？

近時日本ではメタボ退治が大問題となり、メタボ検診が始まるらしい。しかし、ばかデカイハンバーガーやばかデカイ袋に入ったポテト、ポップコーンを日常的に食べているアメリカ人に基準オーバーが多いのは当然。しかして、ジャック・ブラックも



© MMVI NEW LINE PRODUCTIONS, INC. ALL RIGHTS RESERVED.

カイル・ガスも明らかにメタボリック症候群だから、男としての魅力はゼロ。

ところが、ジャック・ブラックのような太っちょ中年男の喉から、どうしてあんなキレイな声が出るの……？ また、ジャック・ブラックをはるかに上回るメタボ度の上、ハゲというハンディキャップまで背負っているカイル・ガスの指から、なぜあんなすごいギターの音が出るの……？ そう考えると、メタボ退治にうつつを抜かすより、人間としてそれぞれが持つ才能を磨く方が大切では……？

R - 15指定とされた理由は……？

美しいメロディには美しい歌詞がふさわしい。かどうかは大いに疑問。とりわけ、ロック音楽ではそう。そのことが、この映画を観ていると、そして「テネイシャス D」の音楽を聴いているとよくわかる。

少年時代のジャック・ブラックが家出同様に1人ハリウッドへ旅立ったのは、彼の作詞は放送禁止用語を含む、厳格なカトリックの家庭では聞くに耐えない下ネタ言葉のオンパレードだったため。大人になると、その才能にさらに磨きがかかったらしく、「テネイシャス D」の美しいバラード曲『ファック・ハー・ジェントリー』の歌詞は、「君とファックしたい」「君にハメたい」「君を突きまくりたい」「君をほじくりたい」

という何ともすごいもの。もっとも、英語がロクにわからない私には、そのハードな歌詞をじっくり味わう能力はないのだが……。

こんなおじさん2人を主人公としたおバカなコメディ音楽映画がR-15指定とされた理由は、まさにその過激な下ネタ満載の歌詞のため。

音楽好きの人は是非！

この映画はミュージカルではなく、美しい音楽満載のギャグ映画、おバカ映画。したがって、ミュージカル映画はキライという人でも違和感はないはず。もっとも、ホントにこの映画を楽しむためには、ジャック・ブラックとカイル・ガスの音楽全般についてもっと勉強することが必要だし、ホントに英語力を身につけたうえでその曲を聴きたいもの。

しかし、そこまでいなくても、気楽に楽しむことができるから、音楽好きの人は是非！

2008(平成20)年6月11日記

ミニコラム

映画から学ぶコンプライアンス

①比内地鶏、飛騨牛、一色産うなぎと続く食品偽装②高級料亭船場吉兆での使い回し事件など、世の中は偽装、偽装のオンパレード。近年コンプライアンス(法令順守)が叫ばれてきたのに、このザマは一体ナニ? それを学ぶのに便利なのが、難しい法律書よりも映画。①カネボウ事件の中央青山監査法人②ライブドア事件の港陽監査法人③耐震強度偽装事件の姉齒元一級建築士など、専門家の責任には『不撓不屈』(06年)がベスト。また世界的金

融危機が広がる今銀行の社会的責任が注目されるが、インサイダー取引や総会屋との癒着で腐った銀行の立て直しを図る姿を描いた『金融腐蝕列島・呪縛』(99年)は必見。さらに公務員改革が遅々として進まない昨今、嫌味なエリート県庁さん織田裕二がパート店員柴咲コウの影響で大変身する『県庁の星』(05年)も必見。やっぱり映画は人生の教科書だ。

2008(平成20)年10月25日記